

日本記者クラブ会報

第207号
1987年
5月10日発行
東京都千代田区内幸町二ノ二ノ一
日本プレスセンタービル 100
◎ 社団法人 日本記者クラブ
電話 五〇三一二七二二(代)

大谷 (朝日) 吉野 (毎日) 両会員にクラブ賞

決算案など承認、総会へ

第121回理事会

日本記者クラブは四月二十七日の第一二一回理事会で、昭和六十一年度の事業報告案、収支決算案および剰余金処分案を承認した。理事会はまた、昭和六十二年度の日本記者ク

ラブ賞を大谷健、吉野正弘両会員に贈ることを決めた。

日本記者クラブ賞は昭和四十七年千葉雄次郎会員から寄託された百万円をもとに創設、その後多くの法人会員、個人会員からの寄付を加えた基金によって運営され、取材、報道あるいは評論活動などを通じて顕著な業績をあげ、ジャーナリズムの信用と権威を高めた個人を顕彰しようというもの。

今年度は会員各位から推薦された六候補のなかから、まず推薦委員会(青木彰委員長)で有力候補を絞り、ついで選考委員会(渡辺襄委員長)が慎重審議のうえ、内規による投票を重ねた結果、両会員を受賞者

として理事会に答申していた。

大谷健(おおたに・けん)会員は昭和五年大阪生まれ、五十七歳、大阪商科大学卒、昭和二十七年朝日新聞入社、東京本社経済部次長を経て、四十八年から東京本社編集委員。国鉄民営化など経済・社会の構造変化の諸問題を、固定観念にとらわれない柔軟な発想から取り上げて健筆を振るい、世論に問題を投げかけた、などの点が評価された。

吉野正弘(よしの・まさひろ)会員は昭和七年東京生まれ、五十四歳、東大文学部卒、昭和三十一年毎日新聞入社、東京本社社会部副部長、論説委員を経て、五十四年から編集委員。五十五年から夕刊コラム『近事片々』を担当し、従来の三行寸評とは違う自由な形式で社会現象を取り上げ、単純なきめつけを一步抜けた、新鮮かつバランスのとれた独特の筆致が支持を集めた。

大谷、吉野両会員は日本記者ク

ラブ賞の受賞者としては十六、十七人目。授賞式は五月二十五日の通常総会の席で行われ、両会員それぞれに賞状のほか副賞として五十万円と記念の特製万年筆が贈られる。

四月のクラブ行事としては、リン米農務長官の昼食会、タンポANC議長、ハレフオール・トルコ外相、李奎浩韓国大使の記者会見、ソ連文化状況に関する研究会、栃折久美子さんを囲む会、春のゴルフ会や料理の講習会など、硬軟さまざま。

このうち、リン長官の昼食会には一七〇人もの多数が集まり、冷房もきかないくらい。またソ連研究会はこれが十五回目というロングラン。その好評ぶりからも、こんどは日米関係をいろいろな角度からみていく新たなシリーズ研究会を始めては、というので、企画委員会が準備中。一方、施設運営委員会の検討を経て、新たに辞書数冊を購入、年鑑類は寄贈を受け、書棚の一角が多少充実し、また『フォーリンアフェアーズ』など、雑誌類も何冊か追加した。活用願いたい。

(事務局長 下田進一)



大谷健氏



吉野正弘氏

とっておきの話

天皇訪米 皇后陛下の手を握る

仲 晃

この私は、どう見ても役者向きにはできていない。背は高いがネコ背で、歩き方にも威厳がない。

そんな人間がいや応なしに公衆の面前で、いや衛星中継のNHKテレビで大勢の日本国民が見守るなかで、訪米中の皇后さまの手を握ってドギマギする――

白亜館からの招待状

このドジな話は、その数日前にホワイトハウスから舞い込んだ一通の招待状から始まった。一九七五年十月、当時共同通信社ワシントン支局長だった私は、日本人特派員団のディーン（最年長）ということで、折から訪米中の天皇、皇后両陛下を迎えてフォード米大統領夫妻が十月二日に、白亜館で催すステート・ディナー、つまり大

晩さん会への出席を求められたのである。両陛下に随行してやってきた大勢の日本人記者団の中から、私に見合う形で最年長の記者が一人招待されていた。

それにしても、支局は超繁忙である。東京の本社から同行してきた多数の社会部、写真部記者たち、ニューヨーク支局からの応援などでゴッタ返し、宿舍や交通の世話から食料の調達、本社への送稿や打ち合わせなど、人手はいくらあっても足りない状況だ。そんなときに支局長がのんびりとホワイトハウスのメンなど食っておられるか、といたいところだが、そうもいっておられない事情がある。晩さん会での両陛下の表情や、ホスト役フォード大統領の歓迎のスピーチのニュアンス、これを受

けての天皇の「お言葉」など、重要ニュースがその場でたくさん出そうだし、夕刊の一方の柱になる「雑観」も、この目でじかに見たものが書ける。

それに、晩さん会の一部始終を日本の各社にブリーフする大事な役割もある。そんなわけで、晩さん会のゲストといえば聞こえはよいが、半分はプール（代表取材）記者なのだ。あれやこれやで、急拠モーニングを着用するハメになった。

モーニングでジョギング

アツという間にその日がきた。洪水のように押し寄せる雑用をさばき、取材の相談に乗っているうちに、ふと時計を見ると午後五時をまわっている。晩さん会のスタートは六時のはずだった。

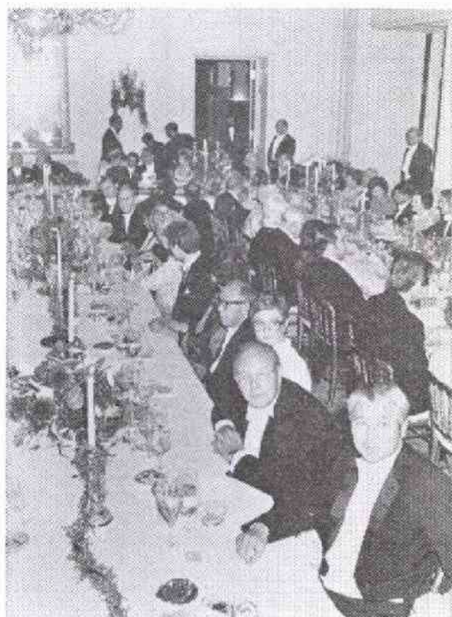
借りておいた礼服に着替えようと思ったが、支局内は足の踏み場

もない。一計を案じ、支局の有能な女性アシスタントをせかして一階上（十三階）のナショナル・プレスクラブへ。

ソツと大宴会場をのぞくと、運良く誰もいない。正面のカーテンのうしろにある広々とした舞台の一隅を借りて無我夢中で着替えた。この世界的に有名な記者クラブでは、前後二回にわたるワシントン在勤中、フルシチョフ、ドゴール、マクミラン、それに日本の岸、池田首相ら、名のある政治家のスピーチを数知れず聞いたが、大宴会場にこんな使い方もあることを初めて知った。

ふだんの取材では走らないことにしているが、これは取材ではないと自分にいいわけをしながら、プレスビルからホワイトハウスまで、二百メートルかそこらをほぼ全力疾走した。モーニング姿のジョギングは、十二年前のアメリカでも珍しかったにちがいない。

ホワイトハウスの二階の大ホールへ、どこをどう通って上がったのか覚えていない。呼吸を整え、



ホロイトハウスの大晩さん会（手前が筆者）

てきたのに拒否した
ら恥をかかせること
になる。何百分の一
秒かの判断で、西洋
騎士道的にふるまっ
たのさ」と答えるこ
とにしているが、実
態は理くつとはほど
遠い。つりこまれ
て、アツという間に
握り返した手の持ち

入り口で招待状を見せたら、アツ
ンジャー（送迎係）をつとめる海兵
隊将校が敬礼し、奥に向かつて
「ミスター・ナカのご到着」と大
音声でアナウンスした。当惑ここ
にきわまりの感があった。
見ると、晩さん会場の入り口に
沿ってホストがズラリと整列し、
お客を迎えて次々にあいさつを交
わしている。
最初はフォード大統領、次いで
ベティ夫人で、ここは型通り突破
した。三人目が、よく見ると天皇
陛下だった。頭を下げたら、うな
ずかれたように記憶する。
ビデオテープなら、ここでフィ

ルムがとまるところだ。次の皇后
さまがニコリして、私の目の前
に手をさし出された。アツと思う
間もなく、その手を握っていた。
この夜は二世の議員などが招かれ
ていたので、その一人とカンちが
いされたのだと思う。テレビはこ
の「歴史的瞬間」（？）をとらえ
たが、写真はどこにも残っていな
い。フォーカス、フライデーの創
刊は数年遅かったのだ。

歎かわしい官僚の小手先細工

主が皇后さまだったということに
なる。
晩さん会の席に着くと、それま
での緊張感がおかしいようにかき
消えた。正面のテーブルで天皇と
ベティ夫人が通訳を入れて話し合
い、少し離れたところでは、当時
まだ独身で「スインガー（遊び人）」
の名をほしいままにしていたキッ
ンジャー国務長官が、得意げに
外交のうちあけ話らしきものをし
ているのが見えた。

ホロイトハウスのディナーは、
フランス料理がベースになってい
るが、ビックリするほど味がよい
のを発見した。畏友の石原榮夫氏
なら「タダの料理としては世界最
高の味」とほめるかもしれない。
本ものの客みたいない気分にな
り、料理やワインをエンジョイし
ているうちに、天皇の「お言葉」
があり、この中で太平洋戦争のこ
とをさして「I deplore」といわれ
た。深く悔いる、遺憾に思う、な
どの訳が英和辞典にあるが、勇気
のあるお詫びの言葉である。
「お言葉」の英文と和文のテキ

ストの間はかなりニュアンスの相
違があり、日本国内向けの和文は
はるかにインパクトが弱かった。
こんな小手先細工を続けている
と、何年か先に日米両国の利害が
対立したような場合に、思いがけ
ぬ国民感情のいきちがいを招く恐
れが出てくる。

食事のあとコニヤックが出て、
葉巻が出て、一流ピアノストの演
奏を聞かされて、やっと解放され
たときは午後十時に近かったよう
に思う。ホールへ出ると日本人記
者団が大勢待ち受けていて質問攻
めに合うかと覚悟していたら、ほ
とんどいなかったので拍子抜け。
「ブール」記者は最高級の「食い
逃げ」を果たし、おまけにこんな
記念写真まで残った。目をこらし
て上部をながめていただと両陛下
下はじめ日米の貴顕が見える。
いまは田舎の老父が客間のカベ
に飾って自慢話のタネにしている
ようだ。

なか あきら氏略歴 大正十五年京都府出身。東
京大学卒。昭和二十六年共同通信入社。ワシント
ン（二回）、シブネープ特派員などを経て整理本部
長、論説副委員長。六十年退社。現在、国際地域
研究センター主任研究員。

日米通商摩擦

ワーキングプレス

ジャーナリストである以上、厳正な中立の立場で判断するのは日本国内はもとよりワシントンの日本人記者も同じだが、日米通商摩擦激化の今日、記者自身が日本人の代表とみなされ米国人の対日批判の矢面にさらされるケースがしばしば起こる。例えば、親日派の有力政治家とインタビュウしているとき、「米国企業の対日市場開拓努力が足りないのではないか」、「日本では買える米国製品が少ないようだ」などと質問すると、たちまち表情が険しくなり、日本の市場障壁を列挙し、見方の誤りを突いてくる。

そこで当方も「米国製半導体の品質が日本製に比べ必ずしもよくないとの日本側ユーザの評判を米企業ですら認めている」などと反論する。そのために時間をとられ、包括通商法案のゆくえなど、記者が本来取材すべき話題がそっちのけになったりする。根拠がいまいちな日本側の説明を、受け売りで米国人にぶつけても確かに取材にはなるが、一方的な対日攻撃

を聞きとるだけに終わる。当方も理論武装して反論すれば、相手から「頑固で言い訳ばかりする不公正貿易国日本の代表」のように思われてしまう。

米側の言い分はそれなりに説得力のある場合が多い。リン農務長官に会うと、ワシントンのスーパーの肉やオレンジ、コメの値段を表示した売り場であった同長官の写真をみせ、「安くておいしい米

取材中も、対日攻勢に合う

田村秀男

国産を日本の消費者がなぜ選択できないのか」とくる。「コメは日本の伝統的社会的基礎」という日本側の言い分を紹介すると、「米車で自動車はすべて国産にすべきだ」という声が出たら、じゃあ、どう答えるのだ」と迫ってくる。いくら日本の製品の品質の良さ、勤勉さ、経済性を説明したところで、米国が競争力を持っていると信じている金融サービス、農

産物、スーパーコンピューター、電気通信などの日本市場参入困難の理由にはならない。

結局相手と議論しながら、米国の主張のうち正当な部分と誤解と思われる部分を選び分ける。もちろん誤解であると分かっても、米議員や政府要人の発言が本音であれば、それを取り上げる。国内での通常の取材では体験したことがないような、複雑な角度からの記者の見識が要求される。

三月二十七日のハワイトハウスでの半導体対日

制裁発表のときは、日本人のひとりとしてかなり

衝撃を受けた。ボルドリッジ商務長官は知日派閣僚のひとりなのに、「怒りと悲しみをもって対日制裁する」と言う。さながら親しかった友人を裁きにより斬り捨てるような宣言だった。日本側の日米半導体協定違反の証拠はそろっていると、米政府高官は繰り返すが、そのデータは「企業秘密に關わる」と一切明かしてくれない。米国人ジャーナリストは対日制裁

の米側発表をすんなりと受け入れるが、「日本人」記者としては何か消化不良のような気分になる。

それでも対話をしながら、取材し米国人の本音、対日政策のゆくえを引き出す作業はエキサイティングだ。

「米国人は日本の製品から文化、食べ物まで関心をもっているのに、日本人は米国の窮状に関心を示さない」と個人的に訴えた政府高官が対日制裁を記者に予告してくれた。日本人記者は「記者」以上の役割を米側からも求められているようだ。

たむら ひでお（一九七〇年日本経済新聞入社、産業第二部、経済部を経て、八四年から米州編集総局ワシントン支局記者）



日米首脳会談の「地ならし役」として訪米した安倍特使（4.21）写真 AFP=時事

知床の伐採

ワーキングプレス

「無暴だ。伐採はやめてくれ」
 激しく営林署員に詰めよる知床自然保護協会の石井政之会長代行。
 四月十四日、知床の森に緊張感が走った。しかし、伐採阻止活動はそれだけで終わりだった。自然保護団体は、抗議の横断幕を掲げただけで、国有林に入る作業員を見送った。前夜から入山していた反対派は伐採木に抱きついたが、阻止はできず伐採作業は簡単に始まった。あまりのあっけなさに、この一年間、もめ続けた問題の本質は何だったのか——との思いがつのる。

知床採伐の争点は自然保護団体の「伐採は生態系を崩す」という主張と、北見営林支局の「択伐は森林活性化のため」という意見に凝縮される。

しかし、木音は別にある。営林支局が「(自然保護団体が)一本も切らせない——という方針を改めない限り交渉の意味はない」と話し合いを放棄したことから、自然保護団体は不信感をあらわにし、「一度、伐採が始まれば、半島先端まで乱伐されるはず」と態度を硬化させた。これに対して営林支局は伐採を中止にしては国有林野事業の基本が崩れるとのメンツから伐採を強行した。問題の本質は不信感とメンツにつきる。

こうした表面の論議と木音が交錯するなかで、個人的には「択伐は必要だが、林業を目的にした択伐を知床で行うのは疑問だ」という立場で取材に当たってきた。しかし、営林支局は一貫して秘

密主義をとり、一時は幹部への取材は必ず広報担当者を通すよう求めたり、地元斜里町長が調停に乗り出した際は、幹部の行方を隠したりした。そして、伐採着手日の発表はギリギリの前日午後だった。このため情報不足から、営林支局サイドの出稿量は減り、マスコミサービスの上手な反対派の記事が目立った。伐採推進集会では、わが社を名指しして「反対の記事が

多く不買運動も辞さない」との批判も飛び出した。こうした問題の難しさに加えて、記者泣かせなのが知床の遠さである。シリエトク(アイヌ語で地の果て)というごとく、北見市から斜里町ウトロまで百二十七キロ。記者三人を配置する網走支局からでも八十二キロ。北見からの取材の場合、出発は未明、一日の大半は車の中ということになる。

さらに伐採地は車が入れる地点から二キロの山中。四月の知床は部分的に一層の積雪があり、取材陣もカンジキを用意して冬山装備が必要だった。地理不案内な山中で反対派を求め、作業員を迫る行動は非常な疲労を強いた。現場には幌別川沿いの急傾斜地もあり、当日は反対派の一人が滑落してずぶ濡れになるハプニングもあったが、もし吹雪などの悪天候に見舞われれば遭難も十分考えられた。

不信感とメンツの争いも

本間 康裕

「無暴だ。伐採はやめてくれ」
 激しく営林署員に詰めよる知床自然保護協会の石井政之会長代行。
 四月十四日、知床の森に緊張感が走った。しかし、伐採阻止活動はそれだけで終わりだった。自然保護団体は、抗議の横断幕を掲げただけで、国有林に入る作業員を見送った。前夜から入山していた反対派は伐採木に抱きついたが、阻止はできず伐採作業は簡単に始まった。あまりのあっけなさに、この一年間、もめ続けた問題の本質は何だったのか——との思いがつのる。

「無暴だ。伐採はやめてくれ」
 激しく営林署員に詰めよる知床自然保護協会の石井政之会長代行。
 四月十四日、知床の森に緊張感が走った。しかし、伐採阻止活動はそれだけで終わりだった。自然保護団体は、抗議の横断幕を掲げただけで、国有林に入る作業員を見送った。前夜から入山していた反対派は伐採木に抱きついたが、阻止はできず伐採作業は簡単に始まった。あまりのあっけなさに、この一年間、もめ続けた問題の本質は何だったのか——との思いがつのる。



賛否両論のなかで始まった知床採伐 (4.14) 写真 北海道新聞

反対運動の効なく伐採は着手されたが、これで終わりではない。営林支局の計画が予定通り進めば伐採は七十年まで続く。知床採伐が、これからの問題であることを示すように伐採後、北見市内に初めて知床問題を考える会が発足した。同会に出席した伐採反対の営林署員は「知床採伐は森林活性化が目的ではなく、伐採による利益がねらいだ。しかし、それを証明するデータはないし、組合が伐採に賛成しているため職場で反対を語りにくい」と告発した。彼の言葉が事実だとすれば、その証拠捜しこそ地方記者の仕事だろう。

ほんま、やすひろ(一九七八年北海道新聞入社、旭川支社、岩内支局を経て八四年から北見支社報道部)

ク ラ ブ ゲ ス ト

水野 忠夫 早稲田大学教授



スターリン

批判後の文化
状況の中で、
エレンブルグ
の「雪どけ」
(オーチエベ
リ)という小

説が発表された。「ロシアでは三月頃ちよつと暖かい日があつて雪どけが始まる。表面は溶けて春の水になるが、その下は雪である。寒さのぶり返しといつても衰えず寒暖交互、本格的な春は五月頃になる」。ブルンチョフ時代の「雪どけ」は、その後長い厳しいいつきに変つた。
ゴルバチョフ書記長のペレストロイカ(改革・再編)展開と呼応するように、バステルナーク、グミリョフ、ザミヤーチン、ナポコフなどの作品刊行が、ソ連作家同盟第八回大会(昨年六月)で提案された。「第二の雪どけ」の到来とみられている。ソルジェニツィンを世に送った「新世界」誌の編集長は、来年の「一、二月号に「ドクトル・ジバゴ」を掲載すると言っている。悲運の死へ去つた作家たちの作品の発禁が解かれる日が近そうだ。
しかし、昨年暮れ、「囚われのロ

シア文学」を著わした教授は、次のようにも言う。

「やつらが愛するのは死者ばかり」というブーシキンの言葉が思い出される。受難の亡命作家たちの帰国が可能となり、彼らの作品がソ連の一般の人々に読まれるようになってからが本当の雪どけで、いまのところは作家や知識人レベルでの雪どけで、そうせざるを得ないところにゴ書記長はおかれているのかも、と。【四月一日(水) 研究会「ソ連—その実態と意図」(XV) 司会 佐野 真金 西委員 出席 五〇人】

オリバー・タンボ アフリカ民族会議 (ANC) 議長



「二万人以上が南アでは捕えられている。四千人余りは十八歳未満の子供たちで、特別収容所でナチ時代のような洗脳が行われている。これを隠くすため南ア政府はかつてない報道管制をしいている」。人類に対する犯罪であるアパルトヘイトに、終止符をうつのは全世界の責任でもあるとし、南アへの制裁措置を訴える。
二十七歳でANCに入ってから、四〇年余りをアパルトヘイトとの戦いに。武闘も余儀ないと言いが、黒人政権への準備もあつてか、穏健な発言も目立った。

①東京にANC事務所の開設を希望するが、当面は外交特権は求めない、②ドクトリンや哲学でなく、ビジネス上のニーズに根ざした国営化政策を考えたい、③ソ連との関係は他のANCを支援する国々と同じ普通のものだ——など。

南アとの経済関係切断でイニシアチブをと、中曽根総理にも要請した。「総理は日本の態度いかんにかかわらず、サミットでそのことを参加者に伝えたい」と満足気。鋼鉄のリーダーというのではなく、厳しい闘争の中にあつても普通の人間の笑いができる、議長は政治、外交手腕が今後ますます問われることになる。【四月二〇日(月) 記者会見 司会 茂井 泰範 西委員 出席 五九人】

リチャード・E・リン 米農務長官

高野委員の気づかいの行き届いた紹介や司会ぶりにも、カリフォルニアのワインやグレイプフルーツのサービスにも、相好をくずさない。長官は生粋の「カリフォルニア人」で、レーガン州知事時代には、そのもとで農務局長を務めた。
あらかじめ日英双方で用意されたスピーチは穏当なものだったが、質疑応答では本音が出て、「I was disappointed yesterday」を二度も。前日の加藤農相との会談で、コメ問題をガット新ラウンドのテーブルにのせることを求めたが、日本側は事実上これに応じなかったのである。

「このような黒字を持つ国が、一産品の百分を国内でまかなおうと考えるのは理にかなわない」と、多国間協議で時間がかかるなら二国間協議でもと迫る。

「米国はウエバーも補助金問題も新ラウンドのテーブルにのせる用意あり」。米国はすでに忍耐の限界にきており、議会では何が起ころるか分からないと言ふ。通商代表部が全米精米業者協会の提訴を却下した際の条件にも触れ、「この期限は多分七、八月。日本はいまのところ何の措置もとっていない」とも。それでもゲストブックには「I hope my talk will improve US-Japan understanding」。

ところで、翌日の米国大使館での会見で、長官は、日本側が新ラウンドでのコメ協議に応じたことを明らかにした。地方選との関係で、政府・自民党が少し時間をかせごうとしたが、長官の不満表明に、このまま帰国させてはまずいととの配慮から急拠動いた、との見方もある。【四月二一日(火) 昼食会 司会 高野 洋企画委員 出席 五七〇人】



ト ゲ ヲ ク ラ

B・ハレフォール トルコ外相



日本とトルコの修好百年を機に、外務省賓客として来日した。外交官出身で駐ソ大使を二度つとめてい

重要な両国の接触と情報交換は双方にとって重要」と語る。①東京―イスタンブール航空路線開設での日本側との話し合いに勇気づけられた、②貿易はトルコの赤字だが、日本からの投資、技術移転を活発にしてこれを補い、さらに貿易拡大につとめたい、③日本主導の企業連合の手になる第二ボスポラス橋の建設は、両国の協力関係の象徴であり、これが続くことを願っている―等々の発言がジャパン・セッション(袋だたき)のニュースの洪水になれた出席者の耳へ。

や同盟国の利害にも、私どもは気がばりしなくてはならない。日本がこのことを十分認識して、現在の世界がかかえる問題に努力することを期待する」と。

クラブでの会見に先立つ複数の在京紙とのインタビューで、エーゲ海での油田探査をめぐるギリシャとの紛争やEC加盟問題、イラン・イラク戦争調停の現況などについてはくわしく語ってしまったためもあり、もう一つ迫力を欠いた会見になってしまった。【四月三日(木) 記者会見 司会 友田錫企画委員 通訳 矢野智恵子 出席 三〇人】

李奎浩 駐日韓国大使

機会あるごとに要請していた韓国大使の会見がようやく実現した。帝国ホテル時代の四十六年四月に李奎浩大使を迎えて以来だから十六年ぶりである。

リ・キョホ氏は大学教授、国土統一院長官、文教部長官を歴任後、大統領秘書室長を経て八五年から駐日大使に。歴史的、政治的背景をしょっての慎重な話ぶりながらも、韓国の代表的な知性の



持つ含蓄が随所にうかがえた。スピーチで南北対話、ソウル五輪、国内情勢、日韓関係などに触れた後、三〇分時間を延長して一〇人の質問に答えた。質問は訳す必要がなかった。大使の日本語は完全なようだ。

「他の国が百年、二百年かかったものを短期間でなす過程では強い政治的リーダーシップが必要である。民主主義を主張する知識人や政治家はこれと対立して、そこに問題が生じたが、民主主義を根づかせる努力も進んでいる。改憲もその一つの試み」 「対話で政治的な平和を獲得するには、イデオロギーや先入観にとらわれすぎでは不可能、南北間に真の対話はいまだ存在しない。信頼の回復なしに対話は成立しない」(ソ連の)共産主義者たちが新しい言葉を使っていることに関心と興味を持っている。米国の北との接触には原則的に反対できないが、均衡感覚が必要だ。ソ連や中国も同じような動きをとるなら緊張緩和につながるが「I O C案通り二競技を平城で開催することを受け入れれば画期的なことになるが、北がI O C憲章を認めて参加する確証はまだない」 「日本も韓国もアジアN I C Sも共存共栄の原則で進まねばならない。軍事的征服だけが征服でない。経済的にある国をあまりに支配するものも征服にはかならない」

韓国哲学学会の会長でもある大使の記念署名は「理性」。「韓日間の問題を理性をもって解決していこうではないかということを書きました」と。【四月二十八日(火) 記者会見 司会 浅井泰範企画委員 通訳 マイ・テイヌー等書記官 出席 一〇六人】

柄折久美子 ブックデザイナー



七二年にブリュッセルに留学し、ルリエール(ブック・デザイナー)を学び、八一年国際製本工芸家協会から製本工芸マイスターを贈られる。

本が好きで、いい意味で本にこだわる人だ。西洋の本づくりの歴史と東洋のそれを比較しての話から始まり、和本から洋本への日本の変化についても。紙で遅れをとった西洋の羊皮紙を使っていた製本法が、現在の洋本の原形。東西とも元々は巻ものスタイルだったが、ペピルス不足で羊皮を使った西洋が、二つに折って重ねて重い表紙をつける形に。日本へは「くるみ製本」で「版本製本」という形で入ったため、手製本の歴史なし、そのため図書館で古い本がダメになっても修理もなかなか。「中性紙を使っているも全自動無線とじ機でつくった今の本は壊れたらもう修理ができないんです」とも。【四月三〇日(木) 懇談会 司会 有馬真喜子企画委員 出席 二五人】

伊丹十三氏を 囲む会

(I)



映画「マルサの女」を製作、監督した、伊丹十三氏を囲む会が、三月十三日(金)午後行われました。製作の苦労やウラ話のほか、独自の日本人論、日本文化論、演技、映画論などをお話いただきました。今号と次号に分載して紹介いたします。

広瀬(企画委員) あこがれの伊丹十三さんをお招きして、親しくお話をうかがう機会を得ましたことを、大変うれしく思います。

伊丹さんは昭和八年京都のお生まれで、映画監督伊丹万作氏の長男です。愛媛県の高校を出られて商業デザイナーをめざして上京されて、その後映画界に入られ、三十五年に大映の「嫌い・嫌い・嫌い」でデビューしました。最近の映画では「家族ゲーム」「逃走地

図」「瀬戸内少年野球団」などに出演されています。三年前に大変有名になった「お葬式」という映画を、奥さんの宮本信子さんを主演につくられました。その後「タンポポ」、そしていま「マルサの女」が大変な話題です。面白くもあり、問題作でもあるということ、まさに「マルサの女」ブームの中にあるわけです。

映画俳優、映画監督だけではなしに、エッセイストとしてもいろいろ活躍されています。テレビの司会のお仕事もされていますし、油絵はプロ級だそうです。五十三歳でいらっしやいます。

伊丹 きょうはお招きにあずかりまして、どうもありがとうございます。いま「マルサの女」という映画をつくったばかりで、皆さんのような方々の前でお話する十分な準備もございませんので、質問に答えさせていただきますながら、懇談形式で進めさせていただきますと思います。

まあ、テーマというのはあまり映画にふさわしくなく、映画にはディテールがあればいいのですが、作品では一貫して日本人論ということをやっております。日本というのは実に不思議な文化であって、何でこんなに不思議なんだろうと考えるながら、ずっと来てしまったような次第です。

—母親型と赤ちゃん型の人間関係—

いろいろ考えたんですけども、結局せんど詰めて言いますと、日本人というのは、人間関係をお母さんと赤ちゃんの関係でやっている文化だというふうに言ってしまうのが、一番いいんじゃないかと思えます。

つまり、人間は誰でも一番最初は赤ちゃんなわけですが、その時に最初に出会う他者がお母さんです。母親と赤ちゃんは、赤ん坊は一人では生きていけないわけですから、二人で一人のような、そういう人間関係をつくっている。この二人は温かい繭のようなものの中に閉じこもって、二人で一人のような生活をしている。赤ちゃんはおなかのすくすくと不快になる。しかし、おっぱいをもらおうと快の状態に戻る。さみしくなるとお母さんが抱っこしてくれる。熱があるとお母さんが冷やしてくれる。のどが乾くと、またお母さんがおっぱいをくれるというふうに、快と不快の状態を行ったり来たりしている。そういう存在だと思います。赤ちゃんは、一言にして言えば、自分の不快をお母さんに解消してもらおう存在であると考えていいでしょう。

この状態は、言ってみれば非常に快適な状態であるわけですね。一生その中にとどまれば、それで一生極楽の中にいるようなことかもしれません。けれども、文化の中に子供が生み出された場合、やはり大きくなるに従って、「お前は大人になりなさい」という圧力が社会からかかってくる。大人になることは何だと言うと、「いつまでもお母さんと二人で一人みたいなのはダメです。お母さんとお前は距離を取っていかなければならぬんだ」ということなんです。

ただ、この二人は放っておくといつまでも切れてくれない。切れる動機が何もない。赤ちゃんはいつまでも自分の不快を誰かに解消してもらったほうが楽なわけだし、お母さんのほうはいつまでも自分のかわいい子供でいてもらいたいわけだから。この二人は、放っておくとなかなか別れてくれないわけです。誰か引き裂いてくれる人が必要です。それが父親というも

のだろうと思います。

「父親がまだ発明されていない文化」

お母さんと赤ちゃんを支配しているのは、非常に図式的に簡単に言っているわけですが、快、不快の原則ですね。快、不快だけでこの二人が生きているとしますと、「世の中というのは、快、不快だけでは生きていけないぞ。自分の欲望を満足させるためには、世の中にはルールなり掟があって、その文化の許す一定の範囲で自分の欲望を満足していかないと大変なことになる。欲しいものがあるから何でも持ってきてしまえばいいというものじゃない。自分の欲望を満足させるためには、秩序に従って満足させなければいけない」というようなことを、口で言ったのではダメなんで、自分から体現しちゃってる人が家庭の中に一人いることによって、子供は自然に母親から距離を取っていくようになる。それが父親の役割だと考えますと、日本の文化は、どうもそういうふうにはなっていない。

日本は、赤ちゃんはいつまでも赤ちゃんで、赤ちゃんとお母さんの関係を果てしなく拡大延長し、この人間関係だけで全部をまかなくていいこうという文化なんじゃないか。日本人が好ましい人間像として念頭に置いている類型は、お母さん型の人間か赤ちゃん型の人間です。お母さん型は自己犠牲的で非常に包容力があって、思いやりがあって面倒見がよくて、相手の事情がよく分かって、包み込んでくれるような人、そういうスケールの大きい人です。男でも女でも、そういう人が立派であると考えている。もう一つは、赤ちゃん

んのように純真で汚れがなくて、罪がなくて、かわいい気のある人。この二つの類型で人間は全部まかなえるんじゃないか、というのでやってきたのが日本人のようです。

ですから、「父親」というものはまだ日本においては発明されていない。お母さんと赤ちゃんのようにじかに人間が結びつくのはよくないことだ、もう一つ上のレベルに照らし合わせて人間関係はやっていかなければいけないというのが、つまり、父親のある文化と言いますか、欧米の文化ですね。そういう欧米の文化と比べると、著しく日本は違う。これはどっちがいいという話じゃありません。全然違う文化である。

「日本人をおカネという断面で切る」

ということ、わたしは長い間考え続けてきました、そういうことを念頭に置いて、日本人のいろんな面をいろんな切り口で切ってみよう、というのが、わたしの仕事のやり方になっていくわけです。一番最初「お葬式」でした。昔、日本にあった共同体というふうなものが、いまほとんど形骸化してしまっていて、われわれはこの消費社会の中でシティ・ボーイのようにして生きている。だけれど、全くその共同体はなくなってしまうわけではなくて、たとえば身内が死んだりした時に、突然その共同体的な規範と言いますか、村の秩序のようなものがよみがえって、われわれの首根っこを押える。しかしそれは全く形骸化して、われわれの内面的な欲求に何も根ざしてないものだから、われわれはただお葬式のルールに形式的に従ってオロオロするばかり。そういう日本人の現状のようなもの

を、若干ニューモラスに描きたかったのが「お葬式」でした。

その次の「タンポポ」という映画では、日本人と食べもの、あるいは食べものとセックスを扱ったわけですが。いまの日本ぐらい食べるとか、セックスをするとかいう人間の欲望が赤裸々な姿で、何のブレーキもなく許されている文化はあまりないんじゃないか。ほかの文化と比べてみれば、非常にゆるやかな文化であって、人間を超えたところの秩序を想定しない文化である。これは非常に不思議でもあるし、日本人をそういう止めどない欲望のようなもので捉えると、どうなるかな、というのでつくったのが第二作の「タンポポ」です。

今度の「マルサの女」では、日本人をおカネという面であらわしてみたいわけですね。いまの日本人は本当に価値を生産性というところへ一元化してしまっている。お母さんが子供に対して「遊んでないで勉強しなさい」というのは、つまり、勉強をさせてどうするかと言えば、いい学校へ行かせて、いい会社へ就職させて……。結局、この社会の中において、生産性の高い人間をつくらうということですね。その手先にお母さんがなってしまう。お母さんは赤ちゃんを、無限に肯定的に受容するということではなくて、生産性がない人間に育ったらどうしよう、という恐怖でもって赤ちゃんを育てている。生産性というのは、結局、まあ言ってみればおカネですから、子供を育てたり教育したりするところまで、あるいは人間を計る物差しが全部おカネに一元化されているというふうな、そういう日本というものを一回捉えてみたかった。それが今度の「マルサの女」という映画です。

ただそれをうまく切る切り口がなかなかなくて、長い間あったためいたわけですけれども、たまたま国税局の査察部という機関があることを知りまして、この連中を主人公にすれば、彼らにおカネを取られて苦しむ人たち、ギューギュー言わされる人たちの修羅場を連続的に並べて、日本人をおカネという断面でスパッと斜めに切れるんじゃないか。そんなふうに思ったんです。

映画監督が自分の作品を解説したりするのは、あまり感心したことじゃありませんけれども、とりあえず以上のようなことなんです。

広瀬 ありがとうございます。皆さんからも自由に質問なり問題なりを出していただきたいと思いますが、まずつなぎとして私の方から質問させていただきます。

「マルサの女」をつくる時、どんなところに苦労されたのか。いま「マルサの女」製作の底にある動機をおっしゃいましたけれど、私の場合は、問題よりもその前に面白さが先にきて、ついつい時間が経つのを忘れちゃったという感じだったんです。

「パチンコ屋さんの話からヒントを得る」

伊丹 いきさつを申しあげますと、いろんなところで喋っちゃったんで気恥ずかしいんですけども、おとし頃、あるパチンコ屋さんと話をしていましたら、パチンコ屋さんが査察に入られた、という話をしてくれました。その時の話が非常に面白かったんです。

査察部というのは、ある日突然予期せぬ時にやって

きまして、その前に少なくとも三か月なり半年なり、彼らは全く知られないで内偵しているわけですから、ある日突然令状を持った人がやってきて強制捜索を始めるわけですね。そのパチンコ屋さんは韓国人の人だったんですけども、とっさのことに韓国語でパバッと、あれをそこへ隠せとか、家族内でやったわけですね。それらちゃん韓国語が分かる人を連れてきていた(笑)。これはやっぱり容易なことじゃないなと、まず思ったわけです。

それでいろいろ聞いてみましたら、そのパチンコ屋さんはなかなか頑固な人だったので、ガサ入れがあった後証拠をいろいろ調べて、実際にどうい具合に脱税していたかを再構成するわけです。そのため毎日国税局の調べ室に呼び出されて調べられるわけですが、半年ぐらい落ちなかった。それがあつた日、遂に落ちた。

調べ室というのは、本当に警察の調べ室と同じで、何にもない部屋です。ただ粗末なスチールのデスクが二つあって、二つのデスクを間にして二人が向かい合っている関係なんです。つまり、あんまり近いと、場合によって刺したりする人がいないとも限らないので、机を二つ間に置いて向かい合っている。部屋の奥に係官が座る場合もあるし、入り口のほうに座る人もある。これは好みなんですけれども、「入り口のほうに相手を座らせたほうが、いつでも出て行けるといふ安心感からつい喋っちゃうもんだよ」、なんて言う人もいますし、それはその流儀がいろいろあるんだと思います。そういう調べ室で毎日調べられて、それを半年ぐらい続けた。

まあ、半年も毎日調べられてると、やはり、商売

のほうもうまくいかなくなるわけですね。実業家としてもだんだんダメになってくる。その人もだんだん気が滅入ってくる。というような非常にいいタイミングの時に、ある日、その日も調べが終わってかたずけてフッと立ち上がった時、窓の外に夕日が沈んでいくんだそうです。それを一瞬、二人がぼんやり眺めた空白の時間みたいなものがあつて、その時、ポツンと係官が、社長を佐藤さんなら佐藤さんといいますと、「佐藤さん、もうこの辺でやめましょうよ」と、ポツンと言ったんだそうです。それでホロッとあつて全部話してしまつた。

というような話を聞きまして、これはつまり警察のようなものとは全然違う。警察だったら、相手は強盗であるとか殺人者であるとかで、十分社会的な制裁が予想されるような人でですけども、脱税者というのはそうじゃない。たとえば会社のためによかれと思ってしている人もいるでしょうし、罪の意識というのがあるんじゃない。いまこの世の中で経済活動をして、大勢の人を率いて、大なり小なり企業のトップに立ってやっているような海千山千の人を相手に、その人の隠した所得を全部暴き出して持つてくるという職業ですから、これはなまじつかの人じゃ出来ない商売だと思つたわけですね。やはり相当な人間的な迫力もなきやいけないだろうし、そういう意味でこういう人たちが主人公になったら、相当面白い映画が出来そうだな、というふうに思つたわけです。それが最初のきっかけなんですけれども。

広瀬 その「もう、この辺でやめましょうや」というのが、最後のシーンで見事に生かされていて、あれで本当にホッととして、一瞬拍手するのを忘れるほどで。

伊丹 はあ……(笑)。

中川 (企画委員) だいぶいろいろ資料集め、エピソード集めに苦勞されたようですが、国税庁の査察というところ、大変われわれも怖くて近づけないところのような感じなんです。国税庁は協力したんですか。

「国税庁長官から即決で協力える」

伊丹 査察部というのはあまり本やなんかになっていないものですから、取りあえず懐へ飛び込もうというところで、国税庁へある方に連れて行っていただきました。ちょうど長官がいらしたんで、長官のところへ挨拶に行きまして、「実は査察部を中心にした映画をつくりたいんだ」という具合にお話ししたら、「どうせ、やるなど言ってもやられるんだらうから、やるんだったら正しい姿を伝えて下さい。そのためには協力いたしましょう」というふうに、ほぼ即決でした。ぼくは五分くらいしか長官の部屋にいなかった。その間に判断を下されて、すぐ広報におろしていただいて、それから後は査察官の人たちの座談会を開いていただいたり、またその方々を個別に取材したり、いろんな便宜を図っていただいて、査察のほうからは山のように集まりました。

ただ、相手のほうが難しかったです。脱税する側のほうがね(笑)。

中川 これは出てきませんね(笑)。

伊丹 ええ。これはなかなか話してもらえないことじやないし、商売の秘密ですしね。だけど、やっぱり税金をしたか取られた人というのは、一回誰かに話したいという気持ちもある(笑)。こんなに取られたと

いうのは、こんなに稼いだ、ということですから、そういう話をした気持ちもどこかあるらしくて。

中川 映画が完成して試写会を見て、国税庁の関係者はどういふ意見だったんですか。

伊丹 大体あの通りです、と書いていました。実際にわれわれがやっている仕事みたいだ、というふうに言っておられました。それと、これでやっとな自分たちの家族に見せられる映画が出来たというので、税務署の人たちとか査察部の人たちが喜んでくれたようです。

中川 そうでしょうね。自分じゃ言えないですからね。

伊丹 ただ、一番最初に長官に会った時にも次のようなことを言ったんです。「翼賛映画みたいなものをつくるつもりは全然ないんで、ぼくは、日本人を切るために、査察部をちょうどいい切る道具として、装置として使わしていただくんだということ、どっちがいいとか悪いとかを、その映画が決めるわけじゃありませんから」と。日本人というのはこういふもので、よと、ボンと現実を放り出せばいいと思っっているの、勧善懲悪のような話にはなりませんけれども、ということも話しました。やっぱり、そこは、いつも敵役になっていらつしやるので、非常に理解はありましたね。突然、国税庁バンザイみたいな映画をつくったところで、そんなものは人びとが受け入れるわけはない、という読みはお持ちだったようです。

広瀬 中曽根総理も見て、売上税のPRにも大変役立ちます、というようなことを言われてたんですが、ぼくの感じはむしろ逆でした。ものすごく恐ろしいことをするもので、ぼくら、全く査察を受けたことがな

い人間にとっては、本当にびっくり仰天するようなすごいことをやっていますから、売上税にひっかけてこういうことをされたらかなわんというので、逆効果があったんじゃないかと思うんですが。

「事実を再構成してフィクションに」

伊丹 「現場の徴税で努力している諸君は非常に苦勞なことだ。この映画に出てくるような悪質なものはピンピンやる。しかし、庶民には温かくやっていきたい」という話がまずあったんです。後で国税庁の現場の人に聞いたら、「ああいうのも困るんです」と言っているんです。つまりどうやったら庶民というのを見分けられるかが分からない、というわけです。別に庶民というのは庶民の顔をしているわけじゃありませんから、庶民の顔をした悪い奴だっているわけだし、庶民じゃない顔をしたいい人だっているわけですからね。徴税の現場としては、そういう気持ちは分かるけど、技術的にはなかなか難しい、というふうな話をしていました。

売上税に関しては「ともかくならし運転のような期間が必要だろうから、三年間くらいはなるべく、まあ何をやってもいいということじゃないんでしようけれども、査察というふうなものはないで、周知せしむる期間として指導していきたい」というようなことを言っておられましたね。

中川 ちょうど納税時期を控えて、また売上税の導入問題などがある時に、非常にタイミングよく封切られたんですけれども、これは計算の上でやられたんですか。

伊丹 計算と言っても、不幸中の幸いみたいなものです。二月というのは、ご存じと思いますが、商売としては一番きついんですね。北海道なんか雪に閉ざされていますから、映画を普通のお客さんが喜んで見に行くような時期じゃないわけです。二月に映画を興行して当てようと思うと、ものすごい「力仕事」になる。少しでもプラスになることは全部使いたいたいということもあって、二月で納税期だから税金の映画みたいな、それがいい方向に回転すれば、プラスにしていきたいということはありました。

広瀬 結果的に二月になったというわけですか。

伊丹 結果的にそうなんです。ぼくは、いつも二月を割り当てられちゃうんですけれども、マイナーですからね(笑)。

広瀬 しかしあまりにもビタリで、少し国税庁からPR料を取ってもいいですね……(笑)。

伊丹 いや、そういう性質のもんでもないでしょうね。

広瀬 それはまあ、そうですね(笑)。

高田(共同OB) 例のルージューの中へ判こを入れたり、小学生のランドセルに貯金通帳を隠して学校に通わせたり、というのは事実なんです。それとも伊丹さんの想像でやったんですか。

伊丹 そういう材料の一つ一つは、ほとんど全部現実にあったことだという具合に考えていただいていると思います。ランドセルに入れるというのは、いつも子供に持たせているというんじゃないんです。査察に入った時、たまたま子供が掛けて行く。そのランドセルの中へとっさにパッと投げ込むというのは時どきあることらしいですね。口紅の中に判こを隠してい

たのも事実で、ああいういろんな隠し場所が出てまいりますけれども、あれは国税局の過去のいろんなデータが写真になっていっているのがありまして、その写真の中から映画に向きそうなものをピックアップして、それを映画の中で再構成してみたわけです。あの中で起こっていることは、細かいことは全部本当です。いろんなところから集めた断片をモザイクのように組み立てて、一つのフィクションをつくり上げたわけなんです。小さい断片は全部本当にあったことです。

高田 ブラジャーの中に隠したなんていうのも、あったことですか。

伊丹 そう(笑)。自分じゃ、ちょっと思いつきませぬね、ああいうことは。

広瀬 しかも下に落としていたっていいのはいいですね。

伊丹 ……………(笑)。

中川 俳優をやっていたらしたということは、監督をするという場合にプラスになるんですか。それとも邪魔になりますか。

監督は役者の体を通して演じている

伊丹 それはやっぱりプラスです。映画の現場のことは大体分かっていますし、監督は演技指導をしなきゃいけないし……俳優さんの生理も分かれますし、その腕前も分かれますので、それに関しては非常に楽だと思います。だから俳優の面倒見は非常にいいんです。世阿弥の言葉で言うと、「心より出でて形に入り、形より出でて心に入る」という言葉がありますけれども、形というの心と同じくらい非常に大事なも

のなんです。日本ではわりに形のほうはおろそかにされるところがあります。ぼくは俳優出身なので、わりに形を整えるといいますか、手だてをいろいろ知ってますんで、衣裳合わせにしてもメイクアップにしても、かつらを合わせるにしても、俳優さんの役づくりを外から手伝ってあげて、心に入りやすいようにしてあげられる。やはり、俳優経験のない監督さんよりはうまいんじゃないかと思えます。そういう意味では、俳優をやっていたことはプラスだと思います。

中村(神奈川) 今後俳優として画面に現れることがあるのかどうか。もうすでに大プロデューサー、大監督におなりですので、そういうことがあるのかどうか、私には想像がつかないんですけども、伊丹さんの俳優としてのイメージで、私に残っておりますのは、「忠臣蔵」のニッケ吉良上野之介のイメージで、これがいつまで経っても離れないんですが。

伊丹 ……………(笑)。

中村 大プロデューサー、大監督のイメージとどうもビタリときませんので、もしも今後チャンスがありましたら少し違うイメージの役柄にお出になるか、あるいはヒッチコックのようにしょっちゅう出て、大監督としてのイメージをリクリエイトしていただきたいと思えますが、いかがでしょうか。

伊丹 吉良上野之介の役は、ぼくは非常に気に入っております(笑)、あれは全部自分が正しいと思ってやったわけですけども。人間というのは、誰でも自己正当化をするわけで、どんな人間だって、自分が正当だと思わなきゃ生きていけないわけです。役によっていろんな正当化のしかたがあるんだと思いますけれども、吉良上野之介の場合も、ぼくは、自分が正し

い、間違っているのは浅野だ、と思ってやっただけなのです。ことさら憎々しくやろうとは全然思わなかったわけです。ただ確信を持って、ぼくのほうが正しいと思ってやっただけなんです。あの役は相当気に入っているわけなんですけれども、ああいう役があったら、またぜひやりたいとは思いますが、なかなかああいう役ってというのはこないですよ、俳優の生涯の中でも。

いまは監督になっちゃったので、あまり俳優をやる必要が現在はないんですけども……。ないというのは、つまり監督というのは、いろんな俳優さんの肉体を通して、いろんな役を自分で間接的に演じているわけですから、自分の肉体の限界を超えて、女の人もやれるし子供もやれる。若いハンサムな人もやれるし、おばあさんもやれるわけです。俳優よりもっとこちらのほうが面白いような気がしているものだから、ちよつといまのところはまた俳優をやるかどうかは分かりませんが、しかし、ぼくらの年配の俳優がだんだん少なくなっているんで、あんまり怠けてもいられない。日本映画のためには、ぼくのような俳優がいたほうがいいとは思いますが。

ですから、多分これからは、ぼくがプロデューサーとして若い監督さんに映画を撮ってもらう、というふうなことが起こってくるかと思えます。そういう時に、出来るだけやりやすく、いい役で、カッコよく見える役を自分にキャスティングして(笑)、俳優として、またたのしみたいとは思っています。

中川 いま映画の魅力みたいなことについてお話があったんですが、伊丹さんは俳優もやってらっしゃいますし、文章も一家をなしていらっしゃる。多才な方な

んですけれども、特に映画については三作つくられて脂も乗っているし、入れあげているような気がするんです。ぼくらどつちかという人と一人で文章を書いて発表していたほうが気楽でいいような気がするんですけども、たくさんの人を使って自分のイメージを実現していくというのは、大変にエネルギーがいるんじゃないかと思うんです。

「映画は燃えかすの残らない表現方法」

伊丹 自分の中の形にならない渦巻のようなものを誰でも持つて思うんですけども、それをたとえ言葉という手段で書こうとすると、言葉にすればするほど、言葉にならないものというものが当然生じてくるわけです。言葉にすればするほど、言葉にならないものがふくれ上がっていくような気持ちがあるわけですね。

ところが映画の場合は、自分の中のいろいろなものを、直接的な形で示すことが出来るので、ワーッと自分を材料にして燃やしちゃうって、燃えかすが残らないというような気持ちよさがあるわけです。それがぼくにあっては、表現形式としての映画の魅力なわけですね。

ただ、ぼくは一映画ファンとして、映画の映画らしさと言いますか、みんなで暗い所で見ると、あの夢も現実ともつかぬ、あの非常に不思議な輝きを持った形式にもすごく惹かれています。そういう映画の映画らしさというふうなものが、どんどん、どんどんいま失われていきつつあるような気がしてもいるんです。おこがましいけれども、何とかしてその映画らしさを

いつまでも求め続けている人間の一人でありたい、という思いはあるわけです。その両方が、わたしを映画にかり立てるように思います。

広瀬 立ち入ってお聞きしたいんですが、奥さんが今度も主演されています。女優としての奥さんと、奥さんとしての奥さんと言いますか、仕事の上のケンカを家へ持ってきたり、その辺のもつれみたいなものはないんですか。

伊丹 いつもは、しょっちゅう同業者として、朝から晩まで芝居の話をしているような夫婦なんですけれども、仕事になると、完全に監督と女優さんという立場になっちゃいます。切り替わっちゃうわけですね。ぼくはいつも映画を撮る時にモニターと言いますか、映画のカメラのファインダーの中に小さいテレビカメラを差し込んで、カメラマンが見ているのと同じ画面を無線で飛ばしてテレビ画面で見ているわけです。モニターですが、その中に現実には俳優さんが芝居しているのが、カメラマンが見ているのと同じ寸法で映っているわけです。この中にマルサの女が活躍したりするわけで、これ、一回も女房だと思っただけで、初めからすね。板倉亮子という役ですけれども、初めからすね。いまで、これは板倉亮子だと思って見ました。それだけ彼女もよくやったわけですね。

女房だという思いがよぎったのは一回だけです。ラブホテルを撮影に行った時に、いまのラブホテルは非常に開いていると言いますか、昔のような陰鬱な世界ではなくて、われわれが外でロケーションをやっていたら、ガラスと窓が一つ開きまして、裸の女の人が出てきてパァーッと手を振るんですね(笑)。ぼくも思わずパァーッと手を振ったりして、そしたら、横で

女房がにらんでいた。その時だけ女房だと思いましたけど(笑)、あとは全部画面の中は板倉亮子で、スタッフも全部、亮子さんと呼んでいましたし、ほくも亮子さんと呼んでいました。

広瀬 映画を撮る間は、やはりその役の名前で呼ぶものなんですか。

伊丹 ええ、それがわりに具合いいみたいですね。

今(経済評論家) 一昨日、みゆき座へ行ったら大変な満席でした、見ていて本当にドラマチックというか、面白いと思ったんですが、伊丹さん、「マルサの女」のもう一つ上をいくタックスの映画を手がけるつもりはありませんか。というのは、金融機関とか大きな企業は国税庁のOBとか、地方では財務局のOBを

講演出張はほとんど新幹線を利用する。これまでのいきさつで、近畿以西の中国、四国、九州方面が多いので、乗車時間は長い。「長時間、よくがまん出来るね」という人もいますが、私には新幹線の時間は大変にありがたい時間だ。

- ①電話が来ないうえに、孤独を楽しめる、
 - ②停車駅が少なく、気が散らずに新聞や読書に集中できる、③振動が少ないので、簡単なメモ書きや新聞切り抜き、スクラップも出来る、
 - ④眠くなれば、居眠りも自由——などなど。
- 新幹線をミニ書齋として活用させてもらっている。

近ごろは少なくなりましたが、航空機は平気で欠航したり、着陸地を変える。台風や低気圧接近、濃霧のためなどと、いとも気軽にアナウンスで、欠航、変更を告

抱えていまして、タックスの問題についてもっとドロドロとしたことが行われているわけです。「マルサの女」は、大変身近でドラマチックなんですけれども、もっと本質的なところをせめたものというか、そういうものを私個人としてはつくってほしいと思うんですが、いかがですか。

伊丹 いまパートⅡというのを考えています。この映画は本当に娯楽映画の路線でつくっているもので、悪びれず、つまり「お葬式」が当たったから「結婚式」というのはちょっとみつもみつもないけれども、「マルサの女」は別に平気でパートⅡをつくっていいような性質のものだと思わんで、いま考えてるんですが。パートⅡの原則は、悪役が第一作より強くなるという原則

げられる。が、告げられる方こそ、いい迷惑。あわてて、電話を入れてあやまらなければならぬ。

講演出張で航空便を利用するのは北海道などの遠いところで、前日に目的地に着くようにしている。何十

◆会員ずいそう◆

新幹線はミニ書齋

野田 皓一

人、多い時は数百人の聴衆に迷惑をかけるわけにはいかない。

こんなことを心にかけているせい、十数年にわたる数多い講演出張で、全く間に合わなかったのはただの

がありまして、したがって、もう少し大規模なものをやろうとは思ってゐるんです。

まあ、具体的に何をとり上げるかはこれからの問題ですけれども、本当は会社をテーマにしてやりたいんです。ただ、会社についていうのはものすごく映画になりにくくって、今回も本当は会社でやりたかったんですけれども、帳簿であるとか粉飾決算とかいうふうなもの、映画にどうやってしたらいいんだか、ちょっといまのところ手だてがなくて、非常に原始的にトランクに札束入れて運ぶみたいな、つまりどう見ても映画として成り立つような素材を今回は選んだわけですから、何とか次は、もう一つ難しい段階に挑んでみたいとは思っています。

(文責・編集部)

一回だけ。数年前のことだが、今もありありと覚えている。

新幹線が架線事故で遅れ、瀬戸内海の港町の停車駅から港まで歩き、高速船に乗り継いで行く島の商工会の講演に遅れてしまった。駅に着いた時が講演の開始時間だった。どう急いでも一時間以上かかる。電話で開催をおくらせてくれるか聞いたが、これは無理だった。何とも申し訳なく、情けない気持ちで駅にたたずんでいた。これがただ一回だけの失敗である。

JR新幹線を今後も利用するつもりだ。ただし、グリーン車利用は少ない。ミニ書齋には普通車のスペースで十分である。

(野田経済研究所会長)

スタジオ訪問

TBSラジオ

[ハローナイト]

ターゲットを ヤングから大人へ

のばかりを作っていたのでは、ラジオの持つ力を自らしぼめていくと思った。「情報をきちんと伝えることでラジオ・ジャーナリズムを復権させたかった」。小桜英夫プロデューサーはこう語る。

番組は二時間半と超ワイドだが、前半に情報色の濃いコーナー、後半に娛樂的な、しかもラジオらしい味わいのある企画ものが並ぶ。その間、ニュース、天気予報、交通情報

が三十分毎に組み込まれる。警視庁の交通管制センターと結んだ夜間の交通情報は、同番組の専売特許だ。それに、タクシードライバーから電話で「ナマの交通情報」をもらい、それも紹介する。「夜の交通情報を、これまでどこもやっていなかったのが不思議なくらい」と小桜さん。「ラジオで一番重宝がられる情報は、『時報』と『交通情報』ですからね」。

九時台は、ニュースが中心になる。報道局編集部専任部長・土屋統督さんが、ニュースキャスターとしてストレートニュースを伝え、解説も行う。「ニュースというだけで聴取者と距離ができてしまいがち。しかも、ラジオは、耳だけが頼り。だから正確で分かりやすく、そして親しみやすいようにと心がけている」と土屋さん。

別番組全体のパーソナリティとして

荒川強啓さんがいる。元山形放送のアナウンサーで、七年前フジテレビの朝ワイド『おはようナイスデイ』のキャスターに引き抜かれて上京、今はフリーで活躍している。「DJ中心の仕事をしてきたので、最初は非常にとまどった。そもそも、情報とは何か、ジャーナリズムとは何か、そしてボクに期待されている庶民感覚、だけでニュースをフォローしているのか……。まだまだ模索しています」。荒川さんは「ひとりしゃべり」の

むずかしさをあらためて感じていると言ふ。「ムダを省いて、コンパクトにまとめてきちんと伝えること、これがこんなにむずかしいとは……。相づちをうつ女性アシスタントがいらないのも、同番組の特徴のひとつ。スタジオでの二人しゃべり」は、聴取者を第三者にしてしまうからだ。

あくまで「きょう」を重視するので、編成は柔軟だ。事件への即応性も備わっている。三原山大噴火、若王子さんの解放、牛歩、国会などの中継を行う中で、大幅にニュースの時間ワケが広げられた。最近のニュース発表やレクチャーのタイミングは、テレビ指向で、しかも特に夕方のニュース番組を念頭に置いているようだ、と小桜さんは言う。「ところが、それ以降、思わぬ展開をすること

も多い。夜は、昼とは違う動きをする。

それをナマでやれる面白さがあります」。翌日朝刊のトップを、前夜に伝える「快感」を味わっているとか。

しかし、土屋さんはこうも言う。「この時間帯に伝えたい」と思うばかりに、勇み足になってしまいう危険もある。一月の若王子さん解放騒動がいい例です」。

TBSはテレビとラジオの並局なので、人材が豊富だ。これからは海外特派員、出先クラブ記者のリポートも、どんどん使いたいと小桜さんは語る。「ハローナイト」は、制作と報道とが一体となった番組だ。午後四時から始まる編集会議には、報道の担当部員も加わる。これも今までにないやり方らしい。「これらのラジオ番組は『演出』から『編集』へと展開していくと思う。これまでラジオはスタッフが少なかった。今後はラジオもプロデューサーが社内の人材をフルに活用し、多方面のアンテナを持っていくことが必要でしょう」。(長谷川和子)



番組にふさわしく、バリトンで落ち着いた声の荒川さん

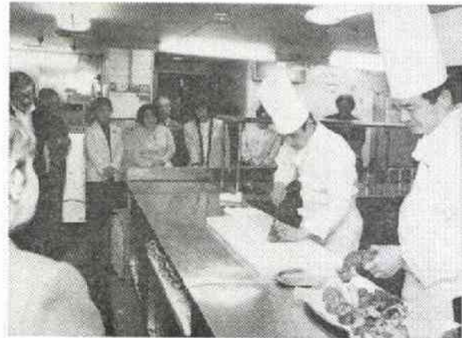
会合紹介

1日▽入社式(時事 村石富行会員) 3日▽関東県域テレビ放送懇談会(山梨 小林 茂会員) 6日▽山中寅文さんを励ます会(朝日 渡辺誠毅会員) 7日▽「ヒロシマアピールズ'87」ポスター完成記者発表会(中国放門原 卓会員) 8日▽白井義男元ボクシング世界フライ級チャンピオン「ザ・チャンピオン」出版記念パーティー(東京 伊藤修会員)▽NTT新聞広告懇談会(NTT 佐田啓助会員)▽対談 宮崎勇大和証券経済研究所理事長と田中直毅経済評論家(信毎 多賀清雄会員) 9日▽民放解説者研究会(朝日放 岡村黎明会員) 10日▽小糸忠吉先生の喜寿を祝う会(共同 仁井田益雄会員)▽論説委員・記者懇談会(E.C委 岸上慎太郎会員) 11日▽日本新聞学会理事会(協会 桂敬一会員)▽クリムスキーC.F.J事務局局長昼食会(協会 宝子山幸充会員) 13日▽テクノロジー・ジャパン開催記念パーティー(日本工業 小池幸一会員)▽JISO(国際衛星共同利用機構)例会(フジテレビ 中出伝二郎会員)▽C.W.ニコル『勇魚(いさな)』出版記者会見(IPR 梅崎義人会員) 17日▽ジェフアーツン・フェロニッツ記者研修計画参加者歓迎パーティー(F.P.C 河村欣二会員)▽全国新聞社出版協議会(共同 藤井寛会員) 18日▽メキシコ日本人移住九十年祭記者会見(伊藤一男会員) 21日▽日本外交協会研究会 講師 久米邦貞外務省中近東アフリカ局審議官(池浦泰宏会員)▽「ある保守党政治家 古井喜実の軌跡」出版を記念する集い(日経新井明会員)▽「ワールドホットライオン」セミナー 講師 ジェラルド・カーチス コロンビア大学教授、小林薫産業能率短大教授(文化放 大室靖雄会員)▽在日外国報道関係者招待レセプション(協会 宝子山幸充会員) 24日▽全国政懇協議会・懇親会(共同 藤井寛会員) 25日▽鈴木勇氏激励会(朝日 白井健策会員) 27日▽近畿・四国地区新聞社部長会 講師 榎誠 総務庁参事官(徳島 谷田匡会員)▽井田敏夫君の年間最優秀プロデューサー大賞を祝う会(コンベンション 黒川幸史会員)▽東京国立近代美術館・児島薫さん歓迎会(東京 夏目十郎会員) 30日▽荒川克郎社長就任記者会見(神戸 都築信会員)

(会員がクラブ施設を利用して行った主な会合です。四月の総回数は二八回でした。)

● アラスカの味 勉強会 ハンガリアングーラッシュ

会員の希望にこたえての新趣向、アラスカの味、勉強会の第一回が、四月十八日午後四時から、クラブレストランで二人が出席して行われた。夫人を同伴した会員が大多数。新シェフの中村立夫さんが、最初に材料や調理方法を説明、その後調理場で実際に数人分をつくらるところをご覧にいれ、あとはレストランへもどっての試食会。アラスカの店長から差し入れていただいたワインをいただきながら、若々しいシェフを囲んでの料理談義がはずんだ。グーラッシュのソースをつくるだけで、毎日15kgのスネ肉やスジを使って一週間煮込むときいてビックリ。もちろん、家庭ではこれはムリなので市販のソースを使う。調理方法も紹介された。次回 は六月に開催の予定。



● ゴルフの会 山本会員が優勝

心配された前日の雨もあがり、快晴となった四月八日(水)、第四十八回ゴルフ会は名門スリーハンドレッドクラブに会員三十五名が参加して行われた。丘陵コースで、グリーンが大変難しかったが、最終安定したゴルフで実力を発揮した山本道雄会員(D)が一昨年の我孫子GCに続き二度目の優勝をした。成績は次のとおり。
優勝・山本道雄 N E T 76、二位・三宅久之(D) 77、三位・小林幸雄(北海道 T V) 78、N P・土田節郎(D)、小藤哲郎(D)。
ブレイ終了後の懇親会兼総会で六十一年度の決算報告が承認され、幹事に高田、森田、谷、西山の各氏が選出された。



プロフィール

◇個人D会員

四月一日付入会の個人D会員、法人・個人賛助会員、特別賛助会員の方々です。

◇六十一年度は46人の会員増

昨年度（六十一年四月と六十二年三月）の会員増加数は四六人でした。

内訳はプレス法人関係（基本、個人A、B、C会員）が一〇人の増、個人D会員が三四人増、法人・個人賛助会員が三人増（社数の増はなし）、特別賛助会員が一人減ということになっております。個人D会員で入会の方々も、それまで基本ないしA会員として登録されていたというケースがほとんどという結果になっています。

◇入会申し込み書のとり扱いについて

入会申し込み書は、原則として入会希望者ご本人にお渡ししていません。推薦権を有する基本会員の請求・指示にもとづいて、推薦者ないし入会希望者にお渡ししております。特に個人D会員（新聞、通信、放送各社OB）、法人賛助会員（一般企業の広報担当）、特別賛助会員（大使館のプレス担当者など）に該当するようなケースの場合は、あらかじめ事務局へこれまでの会員資格委員会の判断等を照会のうえ、入会申し込み書をご請求いただくようご協力願います。

第144回企画委員会(4・10 宴会場)

司会をした委員からの行事報告の後、四月のクラブゲストについて検討した。また、日米問題を中心にした研究会を始めるため、小委員会を設けることを決めた。

出席 藤村委員長。浅井、山岸、友田、

広瀬、有賀、石丸、高野、白井、武藤、木村、中川、村野、ヒルンヤの各委員。

昭和62年度日本記者クラブ賞選考委員会

(4・13 大会議室)

青木彰クラブ賞推薦委員会委員長の報告をうけた後、候補六件について慎重に審議した結果、大谷健氏(朝日新聞社編集委員)と吉野正弘氏(毎日新聞社編集委員)を受賞者として、理事会に答申することを決定した。

出席 渡辺(襄)委員長。渡辺(恒)、

細谷、犬養、吉原、島、志甫、山田、泉の各委員。新井理事長、中江副理事長。

第八期役員選出委員会(4・13 大会議室)

役員社の構成案等について協議した。

出席 渡辺(襄)委員長。渡辺(恒)、細谷、犬養、吉原、島、志甫、山田、泉の各委員。新井理事長、中

江副理事長。

第37回施設運営委員会(4・14 第2会議室)

ラウンジのダイニングテーブル用イスの更新を決めた。

出席 犬養委員長。後藤、佐川、根津、

宮地、山崎の各委員。

第80回会報委員会(4・15 第2会議室)

四月号について意見交換の後、五月号の編集を協議した。

出席 深川委員長。林、井出、斎藤、安延の各委員。

第116回会員資格委員会(4・18 第2会議室)

五月一日付の会員入退会を審議し、理事会へ答申した。

出席 渡辺(恒)委員長。中川、小池、加

藤、玉井、青木、埜邑の各委員。

第14回監事会(4・20 大会議室)

昭和六十一年四月一日から六十二年三月三十一日までの会計監査を行い、決算案を承認した。

出席 白鳥、土居、溝渕の各監事。

第36回総務委員会(4・27 小会議室)

昭和六十一年度事業報告案および収支決算案を承認。剰余金処分案を含め理事会へ上申することにした。



▼このたび「マスコミ転載記」(文一総合出版)という、自作のマンガも入れた本を出版しました。以前に出した宣伝広告の本「キャッチフレーズ・二発必中」(誠文堂新光社)と一緒に、当クラブの書棚に入れさせていただきました。次は、なんとか来年春までに効率的な防衛について私見をまとめようと執筆に入りました。(佐藤 永充)

変便利になりました。

(新住所)

〒104 東京都中央区銀座八一五〇六

TEL 〇三―五七二―三九〇六

FAX 〇三―五七二―三九五

(四国新聞社 溝渕 正行)

▼このところ、税制改革問題に振り回されて、それこそ全くのド田舎まで足を運ぶ日々であった。

この行脚を通じて、感じさせられることも多かった。役所の難解な作文などは見向きもされていない、高飛車な政策には頭から拒絶反応を示す、税には敏感だが歳出面には鈍感……など。(藤田 勝也)

出席 渡辺(襄)委員長。細谷、犬養、吉原、山田の各委員。新井理事長、常盤副理事長。

第121回理事会(4・27 大会議室)

一、昭和六十一年度事業報告案ならびに同収支決算案を原案通り承認し、第30回総会にはかることにした。

一、昭和六十二年度日本記者クラブ賞を、選考委員会答申どおり、大谷健氏(朝日新聞社)と吉野正弘氏(毎日新聞社)に贈ることを決定した。

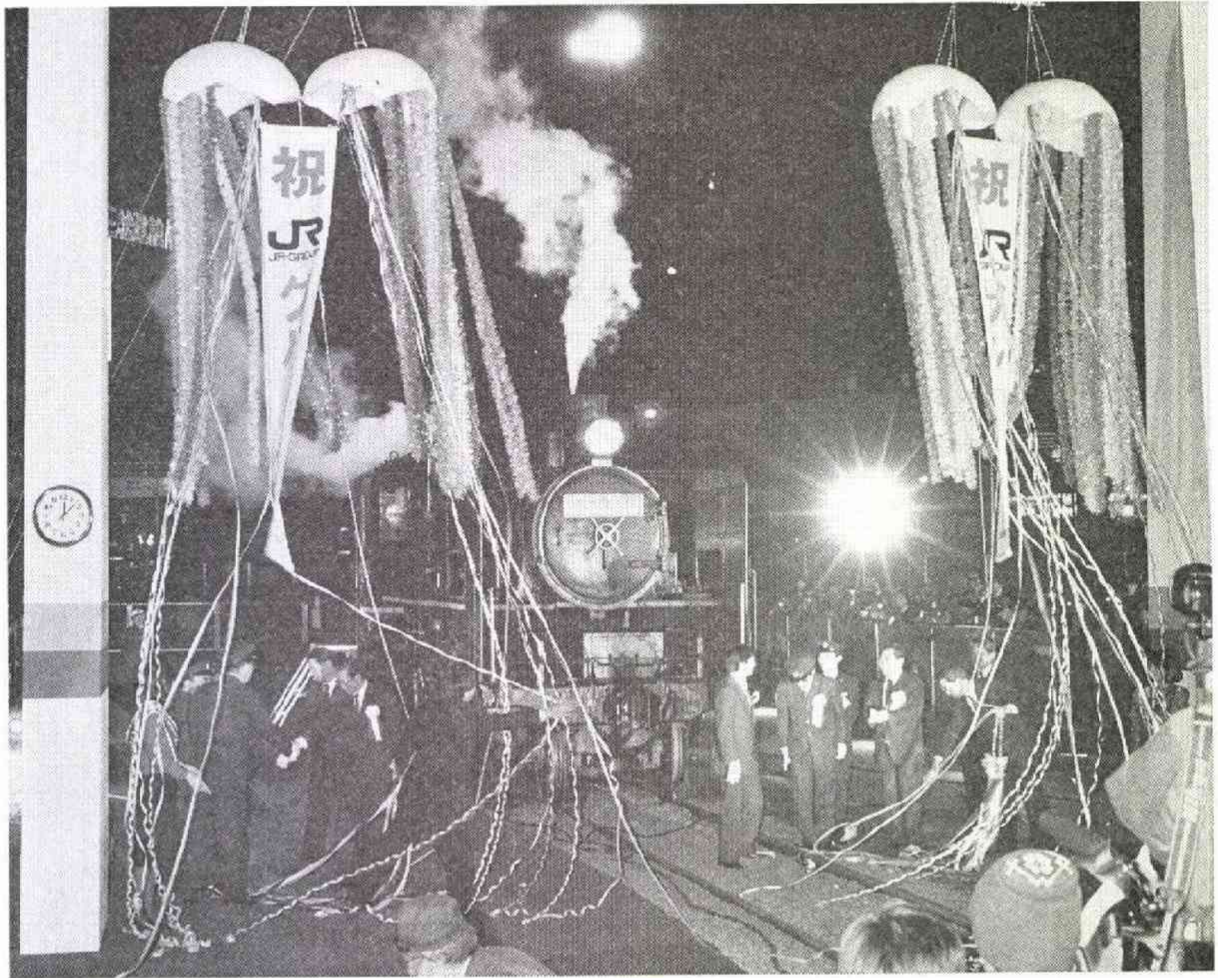
一、渡辺襄役員選出委員長から、第八期の役員構成社案と理事長、副理事長、各委員会委員長人事のとりまとめ方について説明があり、これを了承した。

一、五月一日付での会員入退会を、会員資格委員会答申どおり承認した。

出席 新井理事長、常盤副理事長。渡辺(襄)、渡辺(恒)、細谷、犬養、米、安藤、都築、森、吉原、高瀬、深川、山田、泉、中根の各理事。白鳥監事。

写真部

写真 渡辺照明 (サンケイ新聞社 写真部)



JR誕生！ 国鉄よサラバ

左側の柱の時計は零時八分を指している。四月一日午前。明治五年汽笛一声、新橋（現汐留）から始まった鉄道百十五年の歴史は古いページを閉じ、この日民間新時代に入った。官設、私設の鉄道が鉄道国有法によって国営化されたのが日清・日露両戦役後の明治三十九年。公共企業体としての日本国有鉄道は昭和二十四年からだった。哀愁と希望と期待と。

新聞もテレビ・ラジオも前夜から朝にかけて全国各地の催しや利用者の声を大々的に報じた。この写真も東京・汐留駅での吹鳴式の一コマ。関係者にとってさぞや感慨深いものがあつたらう。だが一般利用者にとっては平常と何ら変わるところがなかった。少し騒ぎすぎの感も。まあ行事は行事。一くぎりだから結構。むしろ、サービス低下などで大変わりされるより、変わりが無いことで内心ホッととしたのが本音である。

JRに变身したからといって、誰もにわかには優良企業に転ずるなどとは思っていない。経営陣も労組もこれまでの親方日の丸意識をかなぐり捨てて、自力で一人前の民間企業へ再生する道はきびしい。現場の表情は明るいようだが、民営先発のNTTのようにいくかどうか。がんばれ！ JRグループ。
(深谷 憲一)

「古代習俗と現代人」で記念講演

五月二十五日(月)午後五時から、作家・九谷才一氏を講師に迎え、総会記念講演会が行われます。テーマは「古代習俗と現代人」です。記念講演に続き午後六時から会員懇親会が行われ、席上、本年度クラブ賞受賞者の大谷健会員(朝日)と吉野正弘会員(毎日)が紹介されます。多数ご出席ください。いずれも一会員一名のビジターをともなうていただいで結構です。ご予約おきください。

「日米関係」シリーズを企画中です

急激なドル安、円高の中で日米の経済摩擦が激化していますが、企画委員会では「日米関係」をテーマにした緊急シリーズを行うための準備を行っています。

特製カレーでワーキング・ランチ

重要ニュース・ソースはこの国でも超過密スケジュールです。そういうこともあって、定着してきたのがプレス・ランチョン(昼食会)のようです。お昼どきのあいている時間をプレスのためにさいてもらい、同じパンを食べて、いざ会見というわけです。

国、公費など諸外国のVIPや、総理、主要閣僚、政党政首、財界首脳などの昼食会とは別形式で、気軽に実質的な昼食会という会員の希望にこたえて、カレーライス、ピラフなどでのワーキング・ランチを行うことになりました。

第一回は、ゲストに東京証券取引所の竹内道雄理事長を招いて、五月十四日(木)正午～午後一時半で行われます。カレーとコーヒーだけです、一時間半

の時間があればよく、それでゲストの話にも質疑応答にも十分時間がとれます。(通常の昼食会は二時間で食事に約四〇分を要する)第二回のゲストには全銀協の神谷健一会長を折衝中です。

新しいクラブタイを製作します

六十年の秋に、会員用のクラブタイを三種類、計六〇〇本をつくりましたが、会員が海外取材や旅行に行かれる際のおみやげや、クラブゲストへの記念品として重宝され、そろそろ在庫が切れるものも出てきましたので、新しいクラブタイを製作することになりました。従来のものより少し上等でシャレたものをとのご意見もありましたので、今度は銀座の和光で製作する予定です。

クラブゲストがどの柄のものを選ぶかという興味もありますので、今回も三種類つくる予定です。おたのしみに。

コーヒー、紅茶は喫茶券で願います

「二二〇円のコーヒー一杯のために、一枚の伝票を切るのもムダだし、会員の方もレジでおつりをもらうため待たされるのめかなわないでしょう」ということで、施設運営委員会では「喫茶券」の製作を決め、今年一月からラウンジで販売いたしております。一冊二〇枚つづりで二、四〇〇円です。コーヒーなどソフトドリンクの注文の際は、できるだけ喫茶券をご利用いただくようご協力願います。

クラブ訪問者

4/10 メリット・クリス
テンセン米ウイスクンシン
州立大学教授・上智大学客員教授 4/16 シャーム

・サラン インド大使館公使

・サラン インド大使館公使
展覧会の招待券 朝日新聞社から「今田美奈子のヨーロッパお祭り菓子展」「日本・中国美術名品展」「華麗なる装いの美展」「ゴヤとその時代」「夏目漱石展」、読売新聞社から「ジョルジュ・ビゴー」「中里無庵とその周辺」「西洋の美術展」、平野光男会員(西武美術館)から「マウリッツ・コルネリス・エッシャー展」の招待券をご恵贈いただきました。お礼申しあげます。

五月一日現在の会員状況 法人会員 一四四社、基本会員 六一四人、個人会員 一、三六二人、法人・個人賛助会員 七六社 二三人、特別賛助会員 七三人、名誉会員 一六人、計 二二〇社 二、二九六人

五月の行事(6日現在)

- 14日(木) 正午～午後1時30分 竹内道雄東京証券取引所理事長昼食会
- 25日(月) 午前11時～12時 デイビッド・ハルバースタム氏を囲む会
午後5時～6時 総会記念講演会 丸谷才一氏「古代習俗と現代人」
午後6時～8時 会員懇親会
- 29日(金) 正午～午後2時 ハウ英外相昼食会

会報委員長 深川 誠

委員 林 利隆 井出新六 斎藤吉史 安延久夫
連絡 長谷川 河野(事務局) 五〇三―二七二二